

## 国宝地藏

そのお地藏様は柔和で、徳があり、それはそれは慈悲の深い面持ちをなさったお方でございます。

昔、昔は道祖神（さえのかみ）と申しまして道路の脇に立ち、その道を行き交う旅人や土地の人を悪霊から守護する神様であられました。

またお地藏様は土地の人々には「遊び地藏」とも呼ばれていました。

それはお地藏様が子供たちと遊ぶのが大好きですぐにどこかへお出掛けになられたからです。

そんなときは決まって子供達と「かくれんぼ」や「かごめかごめ」をしたり楽しくお遊びになっておられました。

また子供達も、お地藏様と喜んで遊び、時には縄で縛って引っぱったり、馬乗りになったり、転げまわしたり、白粉（おしろい）を塗ったりと、大人が見たらびっくりするようなことをして遊びました。大人が「なんともったいない事をするのか」と子供を叱ると、お地藏様は大変御立腹になり、逆に大人をお叱りになったということです。

お地藏様の無類の子供好きはこのことだけに限ったことではありません。

例えば昔は農作業をする際に牛や馬を使っておりましたが、牛や馬を上手に引き廻すのには鼻取りという長い棒を口の所に結わえさせます。

田植え前の忙しい時にその棒を引くのに子供が駆り出されます。

しかし、たまにそんな仕事を手伝ってうまくできるはずがありません。

大人は多忙のため気がたっており、子供はよく叱られました。

その様子を見ておられたお地藏様は見かねて少年の姿になって、その仕事を代わってやり

ました。

勿論そのときは少年がお地蔵様であることは誰も知りませんでしたが後でお地蔵様をみると足が泥だらけになっておられたということです。

そんな心のやさしいお地蔵様でしたが、あるときその村にお役人がやってきて、お地蔵様を調べてみると、有名な彫刻家の不朽の名作であることがわかりました。

村の人々や子供達はみんな喜びましたが、それから間もなくするとお国からお地蔵様を引き取るというお達しがきました。

人々はそれを知ると反対に悲しみました。人々は泣く泣くお地蔵様がお役人に連れて行かれるのを黙って見ているしかありませんでした。

お地蔵様はこのようにしてお国に引き取られ大切に保存されるようになり後に、国宝に指定されました。

このような経路をたどってお地蔵様はそれから長い間、博物館に保管され、そこでお過ごしになられました。

しかし守護神として過ごした昔に比べると、ここには悪霊もいなければ、困っている人もいず、そして何より子供達と遊ぶこともできずにとても退屈な毎日でした。

それでも貴重なお像として大切に保管してくれている守衛の人や学術的な価値を調査している研究者のことを思うと、それをぞんざいにするわけにいかず、今日までここで暮らしておられました。

それでも我慢が限界に達する日がやってきました。

2

ある夜、お地蔵様がいつものように館内で静かに物思いに耽っていると、そのふくよか

で大きな耳に、すすり泣くような声が入ってきました。

最初はこんなところでそのような泣き声が聞こえるはずもなく、空耳だと思ったのですが、段々とはっきり聞こえてきます。不思議に思いましたが、お地蔵様にはどうすることもできずにいました。

しかしそのすすり泣きはそれから毎夜聞こえてきました。

その泣き声が誰かに助けを求めていることがお地蔵さまには、わかりました。

そこで月の光の明るい夜、お地蔵様はこっそり抜け出すことにしたのです。

お地蔵様は退屈には我慢ができて困っている人を放っておくことができなかつたのです。

こうして再び世のため、人のために生きることになったのです。

この脱走は、お地蔵様が元いた村から離れてから200年もたってからのことでした。

博物館をでると庭が広がっていました。

見渡す限り木々の緑が一面に広がる見事な庭園です。

シクシクすすり泣く声の主は、どうやらこの庭のどこかにいるようです。

しかし一通り見渡しましたが人のいる気配は感じられません。

そこでお地蔵様が声を頼りに近付いていくと、庭の中央にある池につきあたりました。

そこには外国から来た小さな少年が悲しげにたっていました。

お地蔵様がわけをお尋ねになると、少年の名前は「小便小僧」といって、この池で20年間、きれいな水（オシッコ）を流しこみ、庭の植物や池の魚に潤いを与えていたのだが、ここ数日間というもの水（オシッコ）がでなくなり、この庭の管理人が自分を壊して新しい小僧と取り換える話を進めている。

それで悲しくて、こうして泣いているのです、と打ち明けました。

お地蔵様はその話をいつものように落ち着いた、穏やかな表情で黙ってお聞きになっておられました。

そして小便小僧の話が終わると、庭に生えている「かわらけつめい」というマメ科の植物を瞬時に乾燥させて、それを少なくなった池の水で煎じて小僧に飲ませてやりました。するとどうでしょう。

ずっと止まっていたオシッコが再びではじめたではありませんか。

更に、二度とオシッコが止まることがないように池の周りに利尿作用のあるこの植物を植え、自然に効果があらわれるようにしてやりました。

小便小僧は知っているかぎりの感謝とお礼の言葉を述べ、このたびのお礼として僕のかわりにこの池の主にならせてあげる、といいました。

お地蔵様は、池の主になるつもりは全くありませんでしたが、小便小僧の恰好があまりにも珍しく、また楽しそうでもあったので小僧に少し真似をさせてはくれないか、と問うたところ小僧は快く承知しました。

そうして小便小僧と向かいあってオシッコの飛ばしあいをして遊びました。

それはお地蔵様にとって本当に久しぶりの子供との戯れであり、心底楽しいひとときでありました。

3

小僧との遊びが明け方近くまで続いたころ、博物館では大騒ぎになっておりました。

守衛の一人が、お地蔵様がいなくなっていることに気付いたのです。

館内では、けたたましく警報機が鳴り響きました。

博物館の前の庭園にいたお地蔵様は、警報を聞いてそこには長くはいられないことを悟

りました。

そして小僧に別れを告げ、誰にもわからないように、そっと町へと抜け出したのです。

小僧は、口では言い尽くせない感謝の気持ちを「おちんちん」に込めて、夜空に向かって勢いよく放水して地蔵様の無事をお祈りしました。

地蔵様は空が少し明らみ始めた頃、隠れるように町にやって来られました。

久しぶりにみた風景は地蔵様が知っておられるものものとは、すっかり様変わりしておりました。

そっと揺らめく風を感じる事ができたことは嬉しいことですが、地面はアスファルトが敷きつめられ、たんぼや畑はおろか土さえも殆ど見当たりません。

川も濁り悪臭が漂っています。山のかわりには高層ビルが立ち並んでいました。

地蔵様はご自分の記憶にある風景と目の当たりにしているものとの落差にビックリしました。まるで「浦島太郎」になったようです。

お地蔵様が環境の変化に戸惑っておられると、今度はウン、ウンと苦しうなさされている声が聞こえてきました。

やはり今度も少年の声に違いありません。お地蔵様は、心配そうに声の主を探されますと、ビルの谷間の小さな隙間に少年がおなかをおさえてうなっていました。

少年のすぐ傍らには荷台と前カゴにたくさんの新聞を乗せた自転車が倒れていました。

お地蔵様が事情を聞かれますと、彼はこの町で毎朝新聞を配っているいわゆる「新聞少年」で、「今日は配る前からおなかの調子が悪く、少し配ったところで歩けなくなってしまったのですが、早く配らないと読者の人が待っているんです。」と、まだ小さいのに、ましてや自分の体調が悪いのに責任感の強いことを言いました。

お地蔵様は少年の言葉に心を打たれ、何とか少年の腹痛を治癒してやることはできない

ものかとお考えになられました。

すると近くの空き地に自生する「げんのしょうこ」が繁茂しているのを見付けました。

お地蔵様はその植物を即座に乾燥させて煎じて飲ませてやりました。

そうしてしばらく安静にしているように言い聞かせ、お地蔵様が少年の姿に形をかえて代りに新聞を配ってやりました。

お地蔵様が新聞を配り終えて少年のところに戻ってみると、少年はすっかり元気を取り戻していました。少年はお地蔵様にお礼の言葉を述べ、そしてマクドナルドにハンバーガーを食べに行こうと言いましたが、「まだ無理をしてはいけません。」と叱られました。

少年はそれでも何かさせて欲しいと言いますと、お地蔵様が「それならば明日の朝一緒に新聞を配らせて欲しい。」と頼まれますと、「そんなことはたやすいことです。」と行ってくれ、明日の集配所で又会う約束をしてその場をあとにしました。

しかしその約束は実現することはありませんでした。

なぜなら翌朝の新聞にはお地蔵様は盗難にあったという記事が写真入りでデカデカと載っていたからです。

お地蔵様は翌日の早朝、集配所を遠くから眺めながら、静かに少年の健康と健やかな成長をお祈りになりました。

お地蔵様は、ほとんど困りました。これでは何のために博物館から逃げ出してきたのかわかりません。

あれほど新聞に大きく取り上げられれば、人を助けることはおろか、人に会うこともまなりません。

お地蔵様は石像のように身が固まる思いがしてゾッとしました。

お地蔵様はそれからしばらくは、人目を避けながら移動なされました。

時には幼稚園や小学校で楽しそうに遊んでいる児童を見掛けることもあり一緒に遊びたい衝動に駆られましたが、グッと堪えて片隅から眺めておられました。

そんな折もおり、お地蔵様の足元に一匹の犬がまとわりついてきました。

「クーン クーン」と甘えるような声で鳴き、又すがるような目でお地蔵様をみています。

そこで何かを察したお地蔵様はその犬に「どうしたのです。」と優しくほほ笑みかけられました。

そうすると犬はワンワンと鳴いて自らの事情をはなしはじめました。

「僕は盲導犬です。僕は10年間、欠かさず主人が歩行するときにお供をして参りました。僕と主人と絶対的な信頼関係で結ばれているのです。でも最近になって突然目に痛みを感じたことがありまして、その時以来次第に見えにくくなってきたのです。主人はそのことにまだ気付いていませんが、もしそれを知ったらどんなに落胆することでしょう。」

犬はそこまでいうと悲しさのあまり泣き出してしまいました。

お地蔵様が犬の目を見てやるとその原因が病気ではなく、突き目であることが分かりました。

そうしてどこからか「みょうが」をとってこられ、その芽の絞り汁をつけてやりました。

しかしこれはすぐによくなるものではありません。

お地蔵様がその日から毎日犬にみょうがの汁を点眼してやりますと、犬の目は次第に具合がよくなり、そのうちすっかり元のように見えるようになりました。

犬がお地蔵様に大いに感謝したことはいうに及びません。

犬は、「お礼に何なりと僕に言いつけて下さい。あなたの為なら何でも致します。と言いました。

お地蔵様はほんとうは犬にかわって盲目の人に手を貸してあげたいと思ったのですが、今は状況が状況だけにそれはできません。

だから「私のことはいいから今のご主人のために全力を尽くしてあげなさい。」と申されました。

すると犬は尚更感激し、

「天地天命に誓ってそうします。」

とお地蔵様に約束しました。

お地蔵様が目の良くなった犬とお別れしたその夜の事でした。

またもや助けを求める声が聞こえてきました。

ただし今度は肉声ではなく「心のこえ」とでもいうようなお地蔵様にしか聞こえないものです。

その声はお地蔵様がお隠れになっておられた場所にほど近い病院から聞こえてきます。

お地蔵様が誰にも気付かれぬようにそっと病室の窓からおのぞきになりますと、そこには女性が一人でベットに寝ておりました。

よくみると泣いているようですが声の主はその女性ではありません。

他にも人がいないか部屋を隅々まで見渡されましたが、やはり他にはいないようです。

お地蔵様が不思議に思っていると再び例の声が聞こえてきました。

その声の主は、女性のおなかの中に居ました。



「お地蔵様。どうか僕を救って下さい。カアちゃんは昨日子宮から出血があって切迫流産で緊急入院したんです。そして今日になっても出血が止まらなくて途方に暮れているんです。僕がこのまま流産になってしまったらカアちゃんきっと気が変になってしまうと思うんです。それではあまりにかわいそうです。カアちゃん、僕が生まれるのをどんなに楽しみにしていたことか。」

お地蔵様は胎児の母親を思う気持ちに心を打たれました。

そして子宮にいい薬草をあれこれ考えていると、すかさず胎児が言いました。

「お地蔵様。カアちゃんは今どんな薬も飲んではいけないんです。いろいろ僕に影響するらしいから15週を過ぎるまでは我慢しなければならないそうです。」

お地蔵様はとても困惑されました。

薬草があればたいいの病気も怪我も治せる自信はありましたが今回はそれができません。

お地蔵様はしばらくぼう然と立ちすくんでおられましたが、何か重大決心をなさったらしく、

「よしっ。」

と気合を入れてから呪いの文句を唱え始められました。

するとお地蔵様の姿がみるみる間に跡形もなく消えてなくなりました。

それと同時に母親の出血も徐々に減りはじめ数週間で完全におさまりました。

その後、お地蔵様の姿をみた人は誰もいません。

マスコミもお地蔵様を盗んだ犯人はプロの盗賊集団の一味であり、高度なトリックでお地蔵様を博物館からもちさったという見方を強めていた。

そして何も解決しないまま半年間が過ぎようとしていた。

病院では半年前の母親が今まさにお産しようとしていました。

母親は産みの苦しみを感しながら必死に頑張っておりました。

そして分娩室に入ってから約1時間たったときかわいいお地蔵様のような子を産み落としました。

いや、そうではありません。

「お地蔵様のような」ではなく、その子は正真正銘のお地蔵様だったのです。

そばにいた助産婦はあまりの衝撃に気が動転してしまっていました。

しかし事態は思わぬ展開に進んでいきました。

もう一人の助産婦がおなかにもう一人赤ちゃんがいることに気付いたのです。

「えっ。双子？モニターには一人しか映ってなかったよ。」

「でも双子っていっても片っ方は・・・」

呪いを唱えたお地蔵様は出血を止めるために自ら母体に入って行かれていたのです。

そうして半年後にこのような形で人間に発見されることを覚悟しながらずっと母子を守ってくださっていたのです。

その後本当の赤ん坊も無事産まれることができました。

それも一重にお地蔵様のお陰であります。

赤ん坊は産声の中にお地蔵様にしかわからない「心のこえ」を交じらせ感謝の意を述べました。

このことは病院のみならず、日本中に驚がくの渦をまきおこしました。

当然お地蔵様の盗難事件を捜査していた警察や、博物館の関係者にも知れることになりお

地蔵様が国宝地蔵であることが確認されると、お地蔵様は再び博物館へと収容されていかれました。

そうして国宝地蔵様は新たに「子安地像」という肩書を一つつけ加えて立派に奉られることになりました。

一方、国宝地蔵様ご本人は、今回の脱走には甚だ満足のご様子で、次回再び助けを求めるような声を聞けばいつでも出動する決意をなさっているということです。

おわり